

## ヘレン・ハンティンドンの「謎」

——『ワイルドフェル・ホールの住人』のカントリーハウス描写が  
教えてくれること

坂 田 薫 子

### 序

ヘレン・ハンティンドン (Helen Huntingdon) がギルバート・マーカム (Gilbert Markham) と結婚し、ギルバートが家父長としてスタンングリー (Staningley) を治めている様子をうかがわせる手紙で幕を閉じるアン・ブロンテ (Anne Brontë) の『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*, 1848) は、ギルバートの「逆玉の輿」<sup>1</sup>に上流階級批判と中産階級礼賛を読み取ることが可能な物語として解釈されることがある。例えば、グウェン・ハイマン (Gwen Hyman) はこの物語を「中産階級による地位、権利の侵害」(85)と「有閑階級が自らを全滅させていく」(85)様子を描いた小説と解釈し、ヘレンとアーサー・ハンティンドン (Arthur Huntingdon) とギルバートの関係に「社会のヒエラルキーの根本的な組み直しの可能性」(86)を読み取っている<sup>2</sup>。さらに、リサ・サリッジ (Lisa Surridge) はヘレンの二回の結婚に時代の価値観の推移を読み取り、この小説はハンティンドンの死とともに上流階級のモラルを欠いた生き方に終わりがもたらされ、ギルバートに象徴されているヴィクトリア朝時代の中産階級の厳しい規律を守る生き方が重んじられていく様子を描いたものであると主張している。しかしその一方で、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) のように、階級問題をこの作品に読み取ることの有効性自体を疑問視する研究者もあり、意見の一致を見ていない。

こうした両極に分かれる批評を前にしていると、次のような疑問が生じ

## 2 坂田薫子

てくる。そもそもヘレンとギルバートの結婚は階級の転覆を読み取ることが可能にするほど極端な「格差婚」なのだろうか。そこで本論文では、作品に登場するカントリーハウスの描写を参考にしながら、ヘレンとギルバートの階級について考察し、その問いに対する回答を与えてみたいと思う。

### 1. ローレンス家について

「序」で示した問いへの答えを出すには、まず、作品の中で明記されることのないヘレンの出自を考察することが必要である。ヘレンの父親、ローレンス (Lawrence) 氏とは、そしてローレンス家とはどのような階級だったのだろうか。ローレンス家のことは、当初身元を隠そうとしていたヘレンの描写からはあまり情報が得られないため、フレデリック・ローレンス (Frederick Lawrence) の描写から判断していこう。

まずはヘレンとフレデリックの関係であるが、もしもジョン・サザーランド (John Sutherland) が考えるように、ヘレンは先代のローレンス氏が愛人に産ませた子どもで、ヘレンはフレデリックの異母姉妹であるとしてこの小説を読み解くと、確かにサザーランドの考察のように、なぜヘレンは実の父親であるローレンス氏に疎んじられ、父親の存命中、父親本人にも、そしてフレデリックにもほとんど会うことがなかったのか、なぜワイルドフェル・ホール (Wildfell Hall) と同じ教区内のリンデンホープ (Lindenhope) 村の人びとはヘレンの正体を見破れなかったのかなど、ヘレンに関するいくつかの疑問点に答えることが可能となる。しかし、この試みは、この小説を言わばセンセーション・ノベルへと変形させてしまうことになり、作者が描かなかった別の小説を再構築することになってしまう。そこで、あくまでもヘレンとフレデリックがローレンス氏の正妻の子どもであると考えて、ヘレンの出自について判断を下していこう。

では、ヘレンの兄フレデリックの描写からローレンス家について推測してみよう。フレデリックはギルバートから「スクワイヤー」(“squire,” 20, 407) と呼ばれている。スクワイヤーとは、ダニエル・プール (Daniel Poole

376) によると、その土地に何世代も暮らしている家系で、テナント・ファーマーたちを持つジェントリー階級への敬称であったという。しかし、1827年のことを綴った義弟ジャック・ハルフォード (Jack Halford) 宛てのギルバートの手紙の冒頭部分で、ローレンス家はそれまではワイルドフェル・ホールに住んでいたが、十五年ほど前にワイルドフェル・ホールとは別の教区にある「もっとモダンで、広い家」(21) であるウッドフォード・ハウス (Woodford House) に移り住んだと描写されている。このことから、ローレンス家がウッドフォード・ハウスに住み始めたのは最近のことで、おそらく先代のローレンス氏のときからでしかないことが分かる。そのため、その前に住んでいたワイルドフェル・ホールの方が代々の家だった旧家なのではないかと推察される。

ただし、ペンギン版の注 (529) は、ヘレンの使用人レイチェル (Rachel) が赤ん坊だったころのヘレンを抱いて、よくワイルドフェル・ホールであやしたと回顧している発言 (391) を受けて、ワイルドフェル・ホールはヘレンの母親である旧姓ミス・グレアム (Graham) の実家であったのではないかと解説している。この注の解釈が正しいとすると、先代のローレンス氏はジェイン・オースティン (Jane Austen) の『エマ』 (*Emma*, 1815<sup>3</sup>) のナイトリー (Knightley) 氏のように、スクワイヤーとして代々暮らしていた生家ではなく、結婚当初は何らかの理由でグレアム家所有のワイルドフェル・ホールで暮らしたということになる。そして、その「何らかの理由」が消滅したときに、ワイルドフェル・ホールからウッドフォード・ハウスに移り住んだということになるのだろう。しかし、フレデリックがギルバートにスクワイヤーと呼ばれているからには、少なくともワイルドフェル・ホールの属するリンデンホープ村の教区か、ウッドフォード・ハウスの属する教区にローレンス家の古くからの地所があるはずである。それが後者のウッドフォード・ハウスだというのなら、「ローレンス氏の実家に戻るために」と記されるべきで、「もっとモダンで、広い家に引っ越すために」(20-21) という描写は不自然である。やはりワイルドフェル・ホールはグ

レアム家の家ではなく、ローレンス家の家と考えるべきではないだろうか。

その一方で、ワイルドフェル・ホールがローレンス家の代々の家だと仮定した場合に釈然としないのは、あれだけゴシップが好きなリンデンホープ村の人びとが旧家のローレンス家の前邸宅ワイルドフェル・ホールで生まれ育ったヘレンをローレンス家の人間として認識できない点である。だからこそサザーランドはヘレンをローレンス家の正式な娘と見なさず、ローレンス氏が愛人に産ませた子であると主張するのである。

ただし、ワイルドフェル・ホールがローレンス家の地所であろうとグレアム家の地所であろうと、その所有者が旧家であることはワイルドフェル・ホールに関する描写から明らかである。ワイルドフェル・ホールはその教区の教会に「家族用の古くからの聖堂内指定席」(17)を持っている。その椅子の「色の褪せた深紅の座布団と裏地」(17)には、もう随分と長い間、人が腰かけた様子はなく、壁には「紋章の描かれたいかめしい盾」(17)が飾られている<sup>4</sup>。また、ワイルドフェルは高台で、周囲は農産物用の畑ではなく、「羊と牛を放牧するため」(22)に「エンクロージャーされた私有地」(22)から成り立っている。その頂にホールがあり、「時代遅れのエリザベス朝時代の領主用の館」(22)であるという。

以上の考察から、ワイルドフェル・ホールをローレンス家の地所と解釈し、ローレンス家を古くから土地を所有し、その地所から収入を得ているジェントリー階級 (landed gentry) の一員であると考えるのが妥当なのではないだろうか。

## 2. グレアム家について

では次に、ヘレンの母親、旧姓ミス・グレアムとはどういう階級の出身だったのかを推察してみよう。それを理解するには、まず、ヘレンのおば、ペギー・マックスウェル (Peggy Maxwell) 夫人について考えるところから始めるのが最適である。

前述のサザーランド以外、マックスウェル夫人の出自について考察し

ている研究者はほとんど存在していないが、デボラ・モース (Deborah Denenholz Morse 106) のように、議論の途中で彼女の出自について触れている研究者たちは、サザーランド同様、マックスウェル夫人は先代のローレンス氏の姉妹だと考えて論を進めている。しかし、果たしてその解釈は適切なのだろうか。詳細は以下の説明に譲るが、筆者は、マックスウェル夫人はヘレンの母親である旧姓ミス・グレアムの姉妹だと考える。そう想定して、ヘレンの出自を考察してみよう。

ヘレンのおじ、おばにあたるマックスウェル夫妻は、第五十二章で詳しい描写が行われている見事なカントリーハウス、スタニングリーに住んでいる。マックスウェル氏が亡くなったとき、彼は血のつながった甥に多少のお金を遺し、また、未亡人となる妻、マックスウェル夫人に年金を遺すが、スタニングリーを含む全財産を血のつながらない姪のヘレンに遺している (473)。ここから分かる事実は、スタニングリーには「限嗣不動産権」が設定されていなかったことである。この作品のもう一つのカントリーハウス、グラスデイル・マナー (Grassdale Manor) とは異なり、スタニングリーはマックスウェル家の男の親族に相続されていくことはない。マックスウェル夫妻が結婚するとき、相当の財産をもたらしたのはマックスウェル夫人の方であるという事実も記されている (473) ことと合わせて、このカントリーハウスの相続が示唆することは、スタニングリーはマックスウェル家の代々の地所ではなく、マックスウェル夫人の父親が購入し、夫妻に与え、「マリッジ・セトルメント (婚姻継承的財産設定)」によって、夫妻の間に子どもが生まれなかった場合は、スタニングリーを含む全財産は、マックスウェル氏側の親族ではなく、マックスウェル夫人側の親族に相続されていくように取り決められていた可能性である<sup>5</sup>。

もしもマックスウェル夫人がジェントリー階級のローレンス家の娘だとすると、爵位もなく、財産もあまりなく、そして、「男子限嗣不動産権」のないスタニングリーがマックスウェル家の代々の地所であったとは考えにくい以上、おそらく土地もなかったマックスウェル氏に、先々代のローレ

ンス氏が娘にかなりの持参金を持たせ、その持参金でスタニングリーを購入してやったということになる。すると、なぜそこまでして先々代のローレンス氏が娘のペギーをマックスウェル氏と結婚させたかったのか、その意図が分からなくなる。なぜならば、ギルバートに畏怖の念を生じさせるほど荘厳なカントリーハウス、スタニングリーと、彼女の甥にあたるフレデリック・ローレンスの所有物である荒れ果てたワイルドフェル・ホールを比べると、ローレンス家がそれほどの持参金をペギーに持たせることが可能なほど財政的に潤っていたようには思われなからである。やはりマックスウェル夫人の父親はグレアム氏で、商売などで資産を貯めた資産家であったグレアム氏が娘ペギーのためにスタニングリーを買い与えたと考えた方が分かりやすくなる。

そう考えると、作品内にグレアム氏に似たような存在が登場することは示唆的である。それはラルフ・ハタズリー (Ralph Hattersley) の父親である。ハタズリーの父親は「裕福な銀行家」(222)で、息子に「カントリー・ホーム」(381)を買い与え、全財産を遺し、「カントリー・ジェントルマン」(458)として生活させている。男女の性は異なるが、資産家であったグレアム氏も娘たちに十分な財産を遺し、その財をもとに上の階級の男性との結婚を可能にさせ、社会的上昇を果たさせることで、彼女たちが「カントリー・レディ」として生きていくことを願ったのではないだろうか。おそらくマックスウェル氏は上流階級の次男以下で、その父親の地所を相続できないため、資産家の娘ペギー・グレアムと結婚したのだろう<sup>6</sup>。こうした解釈を有効と認めると、マックスウェル家にはジェイン・オースティンの『エマ』のウッドハウス (Woodhouse) 家の家系に関するポール・ディレイニー (Paul Delany 7) の説明の一部が当てはまる可能性が高くなる。ディレイニーは、ウッドハウス家は先祖が貴族の次男などであり、ウッドハウス氏の何世代か前の当主が裕福な商人の娘と結婚したか、本人が商売を始めたかのどちらかで、ハートフィールド (Hartfield) は週末を過ごすための住居として建てられたのだらうとその論文で推測している。マックス

ウェル氏も成り上りの商人のグレアム氏の持参金付きのミス・ペギー・グレアムと結婚し、スタニングリーを手に入れたのかもしれない<sup>7</sup>。

このことは、先ほど触れた、ワイルドフェル・ホールはもとは先代のローレンス夫妻のどちらの実家だったのだろうか、という疑問への回答を暗示してくれる。もしもグレアム氏が娘のペギーにスタニングリーを買い与えられるほどの資産家なら、ワイルドフェル・ホールはグレアム家の土地家屋と見なすには少々荒れ果てている。そこから、ワイルドフェル・ホールは、財政難に陥った旧家ローレンス家の地所であるか、あるいは、没落したどこかの旧家が売りに出していたものをグレアム氏がローレンス夫人となる娘のために買い与えたものだという考え方が妥当になってくる。その上で、先ほど論じたように、フレデリックがスクワイヤーと呼ばれている点を考慮すると、やはりワイルドフェル・ホールはローレンス家の持ち家と見なすべきであろう。

ペギー・マックスウェル夫人の父親であり、先代のローレンス夫人の父親でもあるグレアム氏が資産家で、財政難に陥っていた先代のローレンス氏が持参金目当てにヘレンの母親と結婚したとすると、ヘレンの言動のいくつかに説明がつく。ヘレンは母親が亡くなったときに、「母親の希望に従って」(175)、おばのマックスウェル夫人に引き取られている。ヘレンはテキスト内では説明されていない何らかの理由で父親に疎んじられており、ローレンス家の相続人はフレデリック一人で、彼女は「女相続人」(175)ではない。さらにギルバートも「ヘレンの父親は彼女に大した財産を与えてはいない」(470)と述べている。しかし、ヘレン自身が夫アーサー・ハンティンドンの借金を「私の財産から得られる収入のほぼすべて」(246)を用いて返済していると言っているので、何らかの「財産」を持っていることが分かる。おそらくヘレンは母親が彼女に遺してくれた動産(銀行預金や公債)を所有しているのであろう。母親が娘のヘレンに遺したこの動産は、グレアム氏が娘のローレンス夫人に遺したものであり、グレアム氏がローレンス氏と取り交わした「マリッジ・セトルメント」で夫に手

が出せないようにしておいたものと思われる。ヘレンの財産は土地ではなく、すぐに現金化できる動産で、それを切り崩しているのか、あるいは、収入として受け取っている公債の五パーセントの利子をハンティンドンの借金の返済に充てているのだろう。

ちなみに、ハンティンドン自身が借金を返せないのは、ハンティンドン家の財産であるグラスデイル・マナーは、スタニングリーとは違って「限嗣不動産権が設定されて」(470) おり、ハンティンドンには勝手に処分ができないためである。それは、ヘレンとの間に生まれた息子アーサーが二十一歳(成人)になるまで母親のヘレンがグラスデイル・マナーを管理しているという描写(470)が明らかにしている。これはローバラ卿(Lord Lowborough)の地所も同じである。彼も「一族の地所」(189)を持っているが、そこには「限嗣不動産権が設定されて」(189)いて、借金苦にもかかわらず、売ることができない。さらに、ハンティンドンがヘレンの財産に勝手に手が出せないのは、ヘレンの財産がおそらく、ヘレンのおじのマックスウェル氏がハンティンドンと交わしてくれた「マリッジ・セトルメント」(179)によってハンティンドンには手が出せないようになっているからであろう(179-180)。また、ヘレンはハンティンドンの死後、「結婚前に取り決められていた上乘せした少額の財産」(470)を受け取っているため、ヘレンはかなりの持参金を持ってハンティンドンと結婚したことがうかがえる。

このように、ヘレンは、父親の家系はジェントリー階級の最下位に位置するスクワイヤーで、母親の家系は土地持ちではない、商人などの資産家の娘と考えられる。となると、幼少のころは母親に、そして母親の死後は、父親に疎んじられていたため、おばに育てられたヘレンは、グレアム家の姉妹の価値観で育てられたということになる。つまり、アッパー・クラスの価値観ではなく、アッパー・ミドル・クラスの価値観で育てられたと考えられるのだ<sup>8</sup>。「序」で触れたように、確かにこの小説はヘレンがハンティンドンに代表されるような退廃した上流階級の生き方に見切りをつけ、ギ



ルバートに象徴されているヴィクトリア朝時代の中産階級の誠実な生き方を評価する様子を描いてはいるのだが、それはヘレン自身の価値観が変化したというよりも、ヘレンは自らが教え込まれた価値観と同じ価値観を持つパートナーとなってくれる伴侶を、やはりアッパー・ミドル・クラス出身のギルバートに見出したと考えた方が理解しやすくなる。あるいは、変化したのだとしたら、それはヘレンが一時的に母親とおばの価値観に窮屈さを感じ、ハンティンドンたちの上流階級的な生き方に憧れを抱いたものの、その秩序のなさに幻滅し、教育によって身につけていた本来の価値観のよさを認めるに至り、同じ価値観を持つギルバートと人生をやり直す決意をしたと考えた方が自然だろう。

### 3. マーカム家について

そこで次に、ギルバートはどの位置にいるのかを考えてみよう。第一章には、ギルバート・マーカムの父親はリンデンホープ村の地所、リンデン＝カー (Linden-Car) でジェントルマン・ファーマーをしていた人物で、息子のギルバートには「父から受け継いだ田畑からなる地所」(11)を無事に子孫に引き継いでいく誠実な生き方を望んでいたことが記されている。ギルバートはリンデンホープ村で、近隣のライコート・ファーム (Ryecote Farm) を経営するウィルソン (Wilson) 家や、司祭館に住むミルウォード (Millward) 家などとの社交を楽しんでいる。のちにヘレンと結婚し、スタニングリーに移り住むに当たって、弟のファーガス (Fergus) に農場を譲っている(488)が、マーカム家は家父長制に基づき、ジェントルマン・ファーマーとして代々当地で暮らしている堅実な一族だということが分かる。

ジェントルマン・ファーマーとは、プール (313) によると、以前はヨーマン (自身の土地を持つ小規模な独立農夫 (Pool 394)) と自称していた人びとのことで、ジェントリー階級よりは狭いが、かなりの土地をファームしている人びとを指したという。スクワイヤーのように自身のテナントはおらず、自らも農場で働いていた彼らは、社会的にはジェントリー階級よ

り下であるが、テナント・ファーマーに過ぎない人びともいた一方で、中には自分の土地をファームしている人びともおり、自身も農業労働者を雇っていたという。マーカム家はテナント・ファーマーではなく、土地持ちのヨーマン（独立農夫）の出である。第十三章では、自分の農場に隣接していた田畑をロバート・ウィルソン（Robert Wilson）から購入することを交渉している（111）。そして、実際農業労働者を雇っており、ギルバート自身も時折農業労働者と一緒に田畑に出ている。まさに典型的なジェントルマン・ファーマーであることがうかがえる。

となると、ギルバートはジェントリー階級のすぐ下に位置しており、彼が、堅実な父親とは異なり、一つ階級を上がったところにある有閑階級であるジェントリー階級に入ることを夢見ている冒頭の場面は、決して身の程知らずの高望みではないことが分かる。ジェントリー階級の最下位にいるスクワイヤーであるフレデリックに一定の敬意を払いつつ、横柄な態度を取るのも、田畑を広げようとしていることが示すように、農場が繁栄していることから覚える自負のなせる業なのだろう。グレート・ランドオーナーであったハンティンドンの未亡人であり、カントリーハウス、スタニングリーの所有者となったヘレンへの求婚については、さすがに身分不相応ではないかと躊躇したギルバートであったが、もしもヘレンが未婚で旧姓のローレンスを名乗っていたら、求婚に躊躇しなかったものと考えられる。

しかし、未亡人となったヘレンに求婚するのはそれほど身分不相応なのだろうか。ギルバートはヘレンと結婚することによって、ハンティンドン家の由緒正しい地所、グラスデイル・マナーを相続したわけではない。グラスデイル・マナーは、家父長制を犯すことなく、ハンティンドンの息子のアーサーに無事に引き継がれる（486）。ギルバートが自分の直系の息子に相続させることになるのは、ヘレンのおばが自分の父親のお金で買い与えてもらった（つまり、商売のお金で買った）のであろうスタニングリーである。リンデン＝カーを弟に譲り、スタニングリーでは肉体労働としての

ファーミングには従事しなくなったギルバートの子孫は、今後何世代かを  
 経て、スクワイヤーと呼ばれるようになると考えられるので、確かに階級  
 の階段を一段上っている一方で、この出世は中産階級からの下剋上という  
 ほど大胆なものではないと考えられる。

## 結び

以上のように、ローレンス家、グレアム家、マーカム家という三つの家  
 族の階級を詳しく分析してみると、確かにヘレンとギルバートの結婚はい  
 わゆる「格差婚」ではあるものの、しかし、二人の間には二人の結婚に「社  
 会のヒエラルキーの根本的な組み直しの可能性」(Hyman 86)を読み取る  
 ことを可能にするほどの「極端な階級差」(Berry 45)はなかったと考える  
 ことも可能なことがうかがえる。

さらに、ヘレンとギルバートの結婚に階級の転覆を読み取ったり、作者  
 による上流階級批判や中産階級賛美を読み取ったりすることが必ずしも適  
 当ではないことは、ハンティンドンとギルバートの間には相違だけではなく、  
 類似も多々存在していることからもうかがえる。ハンティンドンとギ  
 ルバートの類似は、例えば、弱い者いじめと暴力(ハンティンドンの動物  
 虐待、ギルバートのフレデリック襲撃)や女性蔑視(ハンティンドンによる  
 ヘレンいじめ、ギルバートがメアリ・ミルウォード(Mary Millward)、エ  
 ライザ・ミルウォード(Eliza Millward)、ジェイン・ウィルソン(Jane Wil-  
 son)たちに抱く偏見)などに明らかである上、ハンティンドンがヘレンの  
 手紙を友人たちに読ませ(226)、そしてギルバートがヘレンの日記の内容  
 を義弟に明らかにする行為などにも共通点がある。そのため、ギルバート  
 のアンチ・ヒーロー性を指摘するテス・オトゥール(Tess O'Toole)やプリ  
 ティ・ジョシ(Priti Joshi)のような研究者も存在するのだろう<sup>9</sup>。また、リ  
 ンデン＝カーで女性たちと多くの時間を過ごし、それもゴシップに花を咲  
 かせるギルバートの描写は、ジェイン・オースティンの小説のジェントリー  
 階級の男性の登場人物たちの描かれ方に似ており、お酒とギャンブルと女

遊びにのめり込んだハンティンドンの墮落した生活とは別の側面において、上流階級の表象に近く、ギルバートを中産階級の価値観の象徴としてのみ理解するのは難しい。

「序」で取り上げたイーグルトンの指摘のように、階級とモラルを結び付けてこの作品を読解しようとする方法では必ずしもこの作品の難解さを解きほぐすことができないのもこのためであろう。アン・ブロンテはむしろ、彼女が正しいと考える価値観、間違っていると考える価値観を、ヘレンのパートナー選びによって肯定したり否定したりしようとしたのではないか。これまで既に多くの研究者が試みていることではあるが、ブロンテの宗教観、ジェンダー観などを考察しながら、多角的、複眼的に『ワイルドフェル・ホールの住人』を読み解く行為が今後にも必要になっていくだろう。

#### 注

1 まず、ヘレンとギルバートの階級が決定的に異なっていることを指摘する研究者としては、例えばローラ・ベリー (Laura C. Berry) やジル・メイタス (Jill Matus) がいる。二人の階級について、ベリーは「極端な階級差」(45) を、メイタスは「階級と財産における不釣り合い」(118) を見出している。

次に、ヘレンとギルバートの「格差婚」について、ステイーヴィー・デイヴィス (Stevie Davies) はペンギン版の「イントロダクション」で、「ヘレンは彼を見つけるために、一つ階級を降りなければならない」(xxviii) と、メイタスは、ヘレンがギルバートを「階級においてのみでなく、モラル上と精神的な地位をも引き上げている」(109) と述べている。

2 ただし、ハイマンは、ギルバートが自らも労働に従事するファーマーであるだけでなく、ジェントルマンでもあることによって、お酒で身を持ち崩したハンティンドンにより一度失墜させられた「ジェントルマン性」(85) は再び権威を与えられているとも論じている。

その一方で、ハイマン (86-87) は、テキストの序文にあたるギルバートから義弟のジャック・ハルフォード (Jack Halford) に宛てた手紙の中に出てくる“wheeled” (10) という表現に着目し、物語の最後でギルバートが「車輪付きの椅子」(87) を使用し、「椅子から立ち上がることができなくなっている」(87) 可能性を指摘した上で、ヘレンは彼を特徴づけてきたはずの労働からギルバートを遠ざけ、ハンティンドンと同じように怠惰で無気力なジェントルマンに変えてしまったのかもしれない、という矛盾も突いている。ハイマン (87) が指摘するように、「車輪付きの椅子」は本来痛風に苦しむ有閑階級が使用していたものなので、若いころの放蕩による影

響なのか、痛風に苦しんでいたマックスウェル (Maxwell) 氏のように、ギルバートもヘレンとの結婚後、贅沢三昧で足腰をやられてしまったのかもしれない。こうした指摘を行うハイマンは、本論の「結び」で取り上げるギルバートのアンチ・ヒーロー性を指摘する研究者たちの系譜に入れることも可能である。

3 『エマ』は1815年12月に出版社のジョン・マリーから出版されたが、当時、年末に出版される本には翌年の年号を付けることが慣例だったため (リチャード・クロニン (Richard Cronin) とドロシー・マクミラン (Dorothy McMillan) xxvii)、題扉の出版年は1816年となっている。

4 ペンギン版の第一章の注 (494) は、この「盾」は「かつて強大な権力を握っていたワイルドフェル家という現存しない旧家」(494) の存在を示すもので、この旧家はヘレンの母親の先祖であると解説している。

5 メイタスも「ヘレンは実は間接的にお婆の財産を相続した」(109-110) と分析している。

6 ペンギン版の第十七章の注 (505) は、マックスウェル夫妻が交際しているウィルモット (Wilmot) 家のタウンハウスにヴァン・ダイクの絵画が飾ってある (146) 点に注目し、ウィルモット家が「法外な財産を持つ上流階級」(505) であり、マックスウェル家が「当時の『最高の社交界』と付き合っていた」(505) ことを指摘している。そうしたロンドンの社交界への出入りを可能にしているのは、マックスウェル氏の家系が元々はよいものであったからなのかもしれない。

7 このように、ベギー・マックスウェル夫人を中産階級出身と見なすと、マックスウェル夫妻に階級差のある結婚を読み取ることが可能になる。すると、マックスウェル夫人が姪のヘレンにハンティンドンとの結婚を思い止まらせようと説く場面に、かつて彼女自身が夫の放蕩に苦勞させられた過去を読み取ろうとするマリアン・ソーマーレン (Marianne Thormählen 170) の単著論文での指摘が生きてくる。

ただし、別の解釈を行っている研究者もいる。ハイマン (85) はヘレンの富を夫ハンティンドンとおじマックスウェル氏が遺したものと考えている。

8 ハイマンはヘレンについて、「ジェントリー階級出身であるにもかかわらず、社会通念としての中産階級の『真の女性』の具現化」(72)、「中産階級の化身」(78, 84) と述べている。

また、ヘレンは、夫のもとから逃げ出したので、生計を立てなければならない立場にあるためとはいえ、自分の芸術的才能を活かし、絵画を描いて売るという「商売」で身を立てている職業婦人であるという点でも中産階級の価値観を体現している。この点に関連して、アントニア・ロサノ (Antonia Losano) は、ハンティンドンがヘレンの日記は燃やさないのに、彼女の絵画とその道具をすべて焼き払ったのは、「彼女の芸術作品が市場に出回る商品となり、それゆえに、自分の妻を商売という色で汚す」(33) ことになることに「屈辱」(33) を感じていたからであると指摘し、テクストにおける「階級の問題」(33) を重要視している。そしてリー・タリー (Lee A. Talley) は、『ワイルドフェル・ホールに住人』を働くシングルマザーの証言として読んだ場合には、ヘレンの日記は「中産階級の働く女性たちのまさに本当の戦い」

(137–138) を立証したものとして読むことができると述べている。

9 ギルバートについては、そのアンチ・ヒーロー性を指摘するもの、ヒーローとして高く評価するもの、そしてその中間の立場を取るものと、その評価は多岐にわたっている。

例えば、ナオミ・ジェイコブズ (Naomi M. Jacobs) のように、ギルバートの「アンチ・ヒーロー性」(223) を指摘する研究者や、オトゥールやジョシなどのように、ギルバートはヘレンに「ふさわしくない」(O'Toole 716)、「適切ではない」(Joshi 915) と手厳しい評価を下している研究者がいる。

その一方で、ソーマーレン (164–168) のように、他の研究者たちの手厳しいギルバート批判を紹介した後、ギルバート「弁護」(164) を行う研究者や、エリザベス・ラングランド (Elizabeth Langland) のように、ギルバートはヘレンによって最終的には成長できたと考える研究者もいる。ラングランドは、「現代の読者は、マーカムとハンティンドンの違いは質ではなく、度合いでしかなく見えるという理由で、ヘレンと彼の結婚に不満を抱いている。理想のヒーローを描かなかったのは、おそらくブロンテのリアリズムの証拠なのだろう」(133–134) と分析した上で、「ギルバートは十分懲らしめられることによって墮落を免れた」(134) と主張している。

さらには、ギルバートに理想像を見出す研究者もいる。例えばソーマーレンとステイーヴン・ウッド (Steven Wood) (278–279) は、ギルバートを理想の農業経営者と見なし、ヘレンのよい夫になることを指摘する。また、セーラ・ハレンベック (Sarah Hallenbeck) はその論文で、「中産階級のジェントルマン」としてのギルバート論を展開している。

#### 引用文献

- Austen, Jane. *Emma*. 1815. Ed. Richard Cronin and Dorothy McMillan. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- Berry, Laura C. "Acts of Custody and Incarceration in *Wuthering Heights* and *The Tenant of Wildfell Hall*." *Novel* 30.1 (1996): 32–55.
- Brontë, Anne. *The Tenant of Wildfell Hall*. 1848. Ed. Stevie Davies. London: Penguin, 1996.
- Cronin, Richard, and Dorothy McMillan. Introduction. *Emma*. By Jane Austen. Ed. Richard Cronin and Dorothy McMillan. Cambridge: Cambridge UP, 2005. xxi–lxxiv.
- Davies, Stevie. Introduction. *The Tenant of Wildfell Hall*. By Anne Brontë. Ed. Stevie Davies. London: Penguin, 1996. vii–xxx.
- . Notes. *The Tenant of Wildfell Hall*. By Anne Brontë. Ed. Stevie Davies. London: Penguin, 1996. 491–534.
- Delany, Paul. "A Sort of Notch in the Donwell Estate': Intersections of Status and Class in *Emma*." *Eighteenth-Century Fiction* 12.4 (2000): 1–16.
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. Anniversary ed. Basing-

- stoke: Palgrave Macmillan, 2005.
- Hallenbeck, Sarah. "How To Be A Gentleman Without Really Trying: Gilbert Markham in *The Tenant of Wildfell Hall*." *Nineteenth-Century Gender Studies* 1 (Winter 2005). Web. 6 Nov. 2014.
- Hyman, Gwen. *Making a Man: Gentlemanly Appetites in the Nineteenth-Century British Novel*. Athens: Ohio UP, 2009.
- Jacobs, Naomi M. "Gender and Layered Narrative in *Wuthering Heights* and *The Tenant of Wildfell Hall*." *The Journal of Narrative Technique* 16.3 (1986): 204–219. Reprinted in *The Brontës*. Ed. Patricia Ingham. London: Pearson Education, 2003. 216–233. Web. 18 Feb. 2013.
- Joshi, Priti. "Masculinity and Gossip in Anne Brontë's *Tenant*." *Studies in English Literature, 1500–1900* 49.4 (2009): 907–924.
- Langland, Elizabeth. *Anne Brontë: The Other One*. Basingstoke: Macmillan, 1989.
- Losano, Antonia. "The Professionalization of the Woman Artist in Anne Brontë's *The Tenant of Wildfell Hall*." *Nineteenth-Century Literature* 58.1 (2003): 1–41.
- Matus, Jill. "'Strong family likeness': *Jane Eyre* and *The Tenant of Wildfell Hall*." *The Cambridge Companion to the Brontës*. Ed. Heather Glen. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 99–121.
- Morse, Deborah Denenholz. "'I speak of those I do know': Witnessing as Radical Gesture in *The Tenant of Wildfell Hall*." *New Approaches to the Literary Art of Anne Brontë*. Ed. Julie Nash and Barbara A. Suess. Aldershot: Ashgate, 2001. 103–126.
- O'Toole, Tess. "Siblings and Suitors in the Narrative Architecture of *The Tenant of Wildfell Hall*." *Studies in English Literature, 1500–1900* 39.4 (1999): 715–731.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew: From Fox Hunting to Whist — The Facts of Daily Life in Nineteenth-Century England*. New York: Simon & Schuster, 1993.
- Surridge, Lisa. *Bleak Houses: Marital Violence in Victorian Fiction*. Athens: Ohio UP, 2005.
- Sutherland, John. "Who is Helen Graham? Anne Brontë, *The Tenant of Wildfell Hall*." *Is Heathcliff a Murderer? Puzzles in Nineteenth-Century Literature*. Oxford: Oxford UP, 1996. 73–77.
- Talley, Lee A. "Anne Brontë's Method of Social Protest in *The Tenant of Wildfell Hall*." *New Approaches to the Literary Art of Anne Brontë*. Ed. Julie Nash and Barbara A. Suess. Aldershot: Ashgate, 2001. 127–151.
- Thormählen, Marianne. "Aspects of Love in *The Tenant of Wildfell Hall*." *New Approaches to the Literary Art of Anne Brontë*. Ed. Julie Nash and Barbara A. Suess. Aldershot: Ashgate, 2001. 153–171.
- Thormählen, Marianne, and Steven Wood. "Agriculture and industry." *The Brontës in Context*. Ed. Marianne Thormählen. Cambridge: Cambridge UP, 2012. 276–282.